

【参考文献】

- DENIZART, Hugo, 1997. *Engenharia Erótica Travestis no Rio De Janeiro*, Rio De Janeiro: Jorge Zahar Editor.
- 川田順造 2001「性 自己と他者を分け、結ぶもの」川田(編)『近親性交とそのタブー』藤原書店、pp.9-30.  
 2004『人類学的認識論のために』岩波書店  
 2005「比較民俗学のために」『比較民俗研究』20号pp.1-4.  
 2006「文化人類学とは何か」『文化人類学』71-3、pp.311-346.
- KULICK, Don, 1998. *Travesti Sex Gender and Culture among Brazilian Transgendered Prostitutes*, Chicago & London: The University of Chicago Press
- 國弘暁子 2005「ヒジュラ:ジェンダーと宗教の境界域」お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報『ジェンダー研究』8:31-54  
 2006『ヒンドゥー女神帰依者としてのヒジュラの多義性 インド、グジャラートにおけるヒジュラの存立構造に関する文化人類学的考察』お茶の水女子大学大学院学位申請論文(『ヒンドゥー女神の帰依者ヒジュラ:聖俗と性の境界をめぐる人類学的研究』という題で風響社より近刊予定)
- NANDA, Serena, 1999 (1990) *Neither Man nor Woman the Hijras of India*: Wadsworth Publishing Co.  
 (蔦森樹、カマル=シン共訳、『ヒジュラ 男でもなく、女でもなく』青土社、1999)
- RITO, Lucia, 1998. *Muinto Prazer, Roberta Close*, São Paulo: Editora Rosa Dos Tempos.

コラム

Column

瀬戸内の小さな島で

香月 洋一郎 (神奈川大学日本常民文化研究所 教授 / 事業推進担当者) KATSUKI Yoichiro

今から二十年ほど前、瀬戸内西部の小さな島をよく歩いていた。その島は面積が一平方キロほど、集落は二つというほんとうに小さな島だったが、瀬戸内海有数の一本釣漁の根拠地として個性的な歴史をもっていた。

その当時、この島が二十年後どうなっているのか、コンピューターで簡単なシミュレーションをしてみたことがある。二十年後は負債とお年寄りしか残らない。コンピューターの画面にはそう要約するしかない数字があらわれていた。実はその当時も、その島が属する自治体は少なからぬ負債を抱え、そしてお年寄りの多い島だったのである。

そして最近、ほぼ二十年ぶりにその島を歩いた。やはり「負債とお年寄りの島」だった。けれども二十年ほど前のお年寄りはほとんど鬼籍に入られていた。かつてのお年寄りの御子息にあたる世代の方が定年後にUターンされて島にもどられ、かつて幼少時をすごした家に住んでおられたのである。その間、何が変わったのか。走り書きにだか略記してみると、新しいハコモノが増え、道の舗装がすんだ。波止がきれいになった。山が荒れた。という点があげられる。この程度の変化は通りすがりの私にもすぐに見てとることができた。

についての問題はいろいろとマスコミでとりあげられていることであるから、ここでは省く。は波止に積み上げられていた様々な漁具がきれいになくなり、波止がすっきりとして歩きやすくなっていくことを示す。かつて瀬戸内の漁師は「七漁具(ななもとで)七漁師」と言われるほど多種多様な漁具を揃えていた。地形や海流が複雑であり、さらに好市場も多いことからこまやかな形でそれらの動きに対応せざるを得ず、専業の漁師であるほど新漁具、漁法の導入に敏感であり貧欲だった。そして一旦使われなくなった漁具でも、置き場がある限り山積みになっていた。いつまたそれらが利用できるようになるかもしれないのだから。そのため瀬戸内の波止は多様な漁具で雑然としていたものである。三十年間は使っていないタコツボの山や、五年前まで使っていた底引き網のさびた金具の脇を抜けて、波止を歩くことになる。それらがきれいに処分された波止になっていた。波止の雑然さが消え、なにか静かな空間となっていた。これはひと世代前の潜在的な漁への姿勢が一掃されたことをも語っている。伝承そのものではなく、その基盤となる意志や意欲がきれいに消えた。けれども現在のお年寄りたちも、折を見ては地先に小船を出し、一本釣りを楽しんでおられる。そこだけを切り取ると、そう大きな変化はないとも言える。

についても同様である。山が荒れ始めると、山が何の稼ぎになるというわけではなくとも鉋や鎌を持って山そうじに出かける。そんな姿勢を持った世代がいる限りは、山が稼ぎの場でもなくなって一挙に荒れることはない。集落に遠い山から少しずつ荒れていく。そんな姿勢が薄い世代が変わると、山の荒れ方は一挙に、そして明快にあらわれる。

人の意思の環境への届き方は、そこに違いとなっははっきりとあらわれてくる。たとえ都会人が言う「自然」の中で人が暮らしている環境においても。家とハコモノと道、そこに意思が強くおさまり、山と海への目配り、心配りがみられる薄くなっているありさまを見ると、自然に囲まれたこの地においても、そこに人はある意味で「都市」の凝縮された断片を持ちこみ、それを生活のなかのなにかと置きかえることで問題を処してきたのだろうか、処していくのだろうか。そんな思いにも至る。